

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### ■ 翻訳の新しい地平を求めて

山岡洋一

#### 一 文末表現を垣間見る

日本語にはたとえば、「～のだ」「～してしまった」「してくれた」などの多彩な文末表現があり、これが日本語の豊かな表現力と論理性を支えている。ところが、英語などの欧米言語には日本語の文末表現にあたるものがないように思えるからか、翻訳という観点で文末表現が注目されることは、これまでほとんどなかったようだ。

### ■ 翻訳とは何か——研究としての翻訳（その5）

河原清志

#### 一 メディア翻訳

翻訳について語る時、その9割9分はいわゆる「プロ」の翻訳家（翻訳者）による翻訳を対象にしている。しかし、人類全体の情報の生成・伝達・受容・解釈・編集などの一連の情報過程において見過ごされてきていることがある。それは、「ノンプロ」による「翻訳（的）行為」（translational / translatorial act）がいかに全人類の情報過程に深く関わっているか、である。今月号は、ジャーナリズム、とくに新聞という媒体（メディア）における翻訳行為について、翻訳学からアプローチし、どのような普遍性と特殊性があるかについて議論したい。

### ■ おすすめしたい韓国の本

福田 知美

#### 一 世界に君を叫べ！

現在日本で絶大な人気を誇っている韓国人アーティスト、BIGBANG が初めて書いたエッセーを紹介する。

**翻訳通信** 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp  
(アットは@に変えてください)

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 文末表現を垣間見る

今後、翻訳の飛躍をもたらさる要因はいくつかある。たとえば、情報技術とインターネットの発達によって翻訳にあたって利用できる情報の量が、以前とは桁違いに増加した。いまでは翻訳者にとって、情報の洪水にどう対処すべきかが悩みのタネになっているほどだ。今後は情報の利用技術を磨くことが課題のひとつになっている。一例をあげれば、大量にある翻訳データをパラレル・コーパスにしてうまく活用できるようになれば、翻訳の質を飛躍的に高める一助になるだろう。同時に、辞書などの翻訳の基礎資料も、情報技術を活用すれば、様変わりするかもしれない。

もっとも、情報の利用技術を磨くだけでは解決できない問題もある。大量の情報を効率良く利用できるようになっても、何に注目すべきかが分からなければ、重要な事実が目に入らない。目の前にある事実をみるためにも、考え方、視点が重要である。もっといえば、理論が必要になる。

そういう例のひとつとして、日本語の文末表現をとりあげたい。日本語にはたとえば、「～のだ」「～してしまった」「してくれた」などの多彩な文末表現があり、これが日本語の豊かな表現力と論理性を支えている。ところが、英語などの欧米言語には日本語の文末表現にあたるものがない。翻訳という観点では、こうした部分は盲点になりやすい。実際にも、日本語の会話でも文章でも文末表現はいくらでも使われているのに、翻訳のノウハウや理論でこれまで、文末表現が真剣に議論されることはあまりなかったようだ。翻訳という観点からは、文末表現は未開の原野に近いようなのだ。この広大な原野を開拓することができないまでも、一端を眺めてみたいと考えている。まずは、大きく遠回りして、中学1年のときに習った英文とその訳し方を考えていく。

### 《I am a boy.》をどう訳すか

ダニエル・デフォーは18世紀前半のイギリスを代表するエンターテインメント作家だが、代表作の『ロビンソン・クルーソー』は何人もの経済学者が好んでとりあげたことでも有名だ。経済は、何億人、

何十億人もの人が関係する複雑な構造体なのだが、その本質を考えると、まずは孤島に流れ着いたロビンソン・クルーソーのたった1人の「経済」について考えてみるべきだというのである。

複雑な現象を考えると、まずはいちばん単純な現象をみる方法があるのなら、翻訳について考えるときにまず、たとえば《I am a boy.》をどう訳すかを考えてみる方法があるといえるはずだ。

中学1年のとき、《I am a boy.》は「わたしは少年です」と訳すよう教えられた。翻訳というからにはこれで満足するわけにいかない。

そこで問題。《I am a boy.》を百通りに訳してみよう。そして、それぞれの訳について、どのような場面で誰がなぜ、こう発言したかを考えていこう。

一見、難しそうな問題だが、そうでもない。百通りの訳なら簡単に作れる（それぞれの場面を考えるには想像力が必要なので、そう簡単ではないが）。I と boy について、いくつもの案がすぐに思い浮かぶはずだ。組み合わせを考えていけば、すぐに百通り以上になる。

まず「わたし」について。英語には日本語と比較したときに、誰でも知っている特徴がある。一人称単数の代名詞が事実上、I しかないのである。これに対して日本語には、一人称単数の代名詞は多彩だし、一人称単数に使える語は代名詞以外にもきわめて多数ある。そのうえ、英語のセンテンスには基本的に主語が必要だが、日本語の場合には必要ではないので、I の訳語にあたる部分が省略可能だ。このため、「わたし」の部分の選択肢が1つ増える。

「わたし」の部分に使える語にはたとえば何があるのか。代名詞に限定したときにすぐに思いつくのは「ぼく」だろう。「おれ」や「おれさま」もあるし、「わたくし」や「手前」もある。「てめえ」「おいどん」「わし」「わしや」「わて」「わい」「こちら」「こちとら」「こっち」もある。「吾輩」や「乃公」「余輩」「余」「麻呂」「当方」などもあ

る。代名詞以外に範囲を広げれば、数え切れないほどの語が使える。

つぎの boy については、「少年」以外にさまざまな意味があることを無視するとしても、「男」と「子ども」の 2 つの意味を重ねた語であることが重要だと思う。《I am a boy.》は、性別を間違えられたときの台詞なら「男」だよという意味になるし、大人と間違えられたときの台詞なら「子ども」だよという意味になる。そう考えると、「少年」の部分に使える言葉もかなり多いことがわかるはずだ。

まず思い浮かぶのは「男の子」だろうが、「小僧」などもある。「男児」や「男子」などもある。「子ども」の系列には「小童」だとか「未成年」「若造」などもある。

このように考えていくと、《I am a boy.》を百通りに訳すのがじつに簡単であることが理解されるはずだ。それぞれ、ニュアンスが少しずつ違う。場面が違い、話し手が違い、相手が違う。翻訳とはこうした可能性のなかから、文脈にぴったりの 1 つの表現を選び出す作業なのである。

そこで、つぎの問題。「わたし」と「少年」を使って、何通りに訳せるか考えてみよう。そんなことができるのかと思えるかもしれないが、じつは簡単である。

まず、「は」の部分について考えてみると、「わたしは少年～」以外に、「わたし少年～」「わたしが少年～」の 2 つがすぐに思いつく。

つぎに「わたしは少年～」までを固定しても、「です」の部分を変えらる。たとえば以下の通りだ。

わたしは少年です。  
わたしは少年だ。  
わたしは少年である。  
わたしは少年であります。  
わたしは少年なのです。  
わたしは少年なのだ。  
わたしは少年なのである。  
わたしは少年ですよ。  
わたしは少年だよ。  
わたしは少年であるよ。

まだまだある。日本語には多彩な文末表現があるので、訳文を何十でも作れる。

では、最後の問題。つぎの 2 つの文がどのような文脈でどのような人物によって使われるかを考えたうえで、それぞれを英訳してみよう。

わたしは少年だ。  
わたしは少年なのだ。

どちらも《I am a boy.》でいいのだが、それでは芸がなさすぎると思うのであれば、「わたしは少年なのだ」をどう訳すのか。

これまでさまざまな機会に翻訳者や翻訳学習者、学生にこの質問をしてきたが、たいしては、2 つの方法がすぐに頭に浮かぶようだった。第 1 に、actually や in fact などの副詞・副詞句を使う方法である。第 2 に、because などの接続詞を使う方法である。答えがない場合にも、この 2 つの方法を示すと納得が得られた。これはじつに面白い現象だと思う。文末表現を副詞か接続詞で訳すようにと教えられたことがある人はまずいないはずなのに、直感的にこれが正しい方法だと感じられるのである。

直感というものがあてになるとはかぎらない。あるときは正解でも、あるときは大間違いということがある。だから、慎重に考えていかなければいけない。だが、正解である可能性があるのであれば、じつに面白いことではないだろうか。

文末表現に関心をもったのは、まさにこの副詞と接続詞の訳し方の常識に対する違和感が嵩じてきたからだ。「のだ」などの文末表現が接続詞や副詞の訳として使えるのであれば、翻訳の方法がかなり変わる可能性がある。だがこの方法を使うと、訳抜けだなどと非難されかねないので、慎重に理論を構築する必要がある。

ある程度まで理論的に把握できた場合、成果は翻訳の方法が変わるだけではないかもしれない。日本語の文末表現が英語の接続詞に似た機能をもっているのであれば、日本語の論理性に関する考え方が変わる可能性がある。また、英語の副詞（さらには形容詞）が日本語の文末表現に似た機能をもっているのであれば、英語の感情表現に関する考え方が変わる可能性がある。そういう観点から、考えを進めていくことにしよう。

## 「のだ」が支える論理構造

まずは「のだ」についてみていこう。「のだ」は、

ほとんど意識されないまま使われているのがふつうだろう。意識したとしても、強調表現の一種だと考えて、それ以上に深く追求することはない。それでも「のだ」に関しては日本語文法という観点で研究がかなり進んでいるようなので、それをある程度まで確認した後に、村上春樹著『ノルウェイの森』とその英訳から実例をみていくことにする。

国文法では、たとえば三上章『現代語法序説』（くろしお出版）のうち、第3章九「ノデアル」が参考になる。三上の議論はつねにそうだが、この節も決して読みやすくないし、まして分かりやすくない。三上の文法理論が理解できたとはとてもいえないが、それでも、いくつかは学べた点があると考えている。「のである」や「のだ」について、三上章はこう指摘している。第1に、「前文との関係性に出でくる」、つまり、前の文との関係を示すものである。第2に「続き具合は順でなくて「逆」である」、つまり、「のである」や「のだ」が使われている文は、前の文との時間的前後関係が逆になるというのである。論理的な前後関係が逆になるというてもいいはずである（逆になっているとはかぎらないようだが）。

三上章の文法論をもう少し分かりやすくした解説が、外国人向けの日本語教育という分野にある。白川博之監修『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（スリーエーネットワーク）（以下では『ハンドブック』）である。その282ページ以下に「関連づけ」という章があり、「日本語には文が他の文や状況と関連性を持っている（関連づけられている）ことを表す形式があります」と指摘し、典型的な文末表現のうち、「のだ」と「わけだ」を扱っている。このうち、「のだ」の部分では、関連づけを表さないものも含めて、さまざまな用法をとりあげている（同書282～290ページ）。ここにあげられた用法と用例を紹介しておこう。

#### 理由、解釈

例 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。  
（デパートで泣いている子どもをみて）きつと迷子になったんだ。

#### 言い換え

例 明日は入社式だ。明日からは社会人なのだ。

#### 発見

例 （掲示板をみて）明日会議があるんだ。

#### 再認識

例 この道はよく渋滞するんだった。

#### 先触れ

例 先生、お話があるんです。お部屋に伺ってもよろしいでしょうか。

#### 命令、認識強要

例 さっさと帰るんだ。

同書にはそれぞれの用法についての解説もあるので、詳しくは同書を参照されたい。

もっと詳しく、理論的な研究に、野田春美『「の（だ）」の機能』（くろしお出版）がある。博士論文に加筆訂正したものだというので、読みやすくないが、幸い、野田春美が執筆にくわかった日本語記述文法研究会編『現代日本語文法4 第8部モダリティ』（くろしお出版）（以下では『モダリティ』）に趣旨がみごとにまとめられている。

両書では、「のだ」をまず、否定などの「スコープ」を表すものと、説明の「モダリティ」を表すものに分類している。

このうち、スコープの「の（だ）」については、「悲しいから泣いたんじゃないやありません」という用例をあげている。「悲しいから泣いた」という部分が「の」（この場合には「ん」）でまとめられ、否定のスコープになって、「悲しいから」が否定の焦点になるという。翻訳という観点からは、野田のいう「否定のスコープ」が、たとえば部分否定の訳し方などで問題になる場合が少なくない。否定や疑問のスコープと焦点は文の論理性を支える重要な要素なので、いずれじっくりと考えてみたい。以下では、もう1つの「説明のモダリティ」を表す「のだ」についてみていく。

野田春美は「説明のモダリティ」の「のだ」を2つの軸で4種類に分類している。提示と把握、関係づけと非関係づけである。それぞれの用例は以下のように示されている（『モダリティ』189～207ページによる）。

#### 提示・関連づけ

・ 私、明日は来ません。用事があるんです。

#### 把握・関連づけ

・ あいつ、来ないなあ。きつと用事があるんだ。

#### 提示・非関係づけ

・ スイッチを押すんだ！

#### 把握、非関係づけ

- ・ そうか、このスイッチを押すんだ。

このうち、「関連づけ」は「先行文脈や状況について、その事情などを提示・把握する」ものであり、「非関連づけ」は「事態をそのまま提示したり把握したりする」ものである。「提示」は話し手が認識していたことを聞き手に提示して認識させようとするときに用いられ、「認識」は「話し手自身が認識していなかったことを認識したときに用いられる」という。提示の「のだ」の関連づけの用法には、「事情の提示」と「換言の提示」があると指摘されている。

なお、「のだ」は提示（理由や言い換え）、把握（発見）などを明確に表すのではなく、かといって言外に表すのでもなく、その中間あたりでそれとなく表す表現であることに注目したい。

### 『ノルウェイの森』の用例

以上を前提に、村上春樹著『ノルウェイの森』（講談社文庫）第一章の実例をみていこう。この章は空白行などで5つの部分に分かれている。それぞれを仮に節と呼ぶなら、第1節は10段落で30行、第2節は1段落で10行、第3節は4段落で44行なので、第2節になって段落が急に長くなる。すぐに気づくのは、長い段落でいくつもの「のだ」が使われていることが多いことだ。第1節では「のだ」は使われていない。第3節第1段落は9行の長い段落であり、ここではじめて「のだ」が使われ、しかも何度も使われている。この段落をみてみよう。

記憶というのはなんだか不思議なものだ。その中に実際に身を置いていたとき、僕はそんな風景に殆んど注意なんて払わなかった。とくに印象的な風景だとも思わなかったし、十八年後もその風景を細部まで覚えているかもしれないとは考えつきもしなかった。正直なところ、そのときの僕には風景なんてどうでもいいようなものだったのだ。僕は僕自身のことを考え、そのときとなりを並んで歩いていた一人の美しい女のことを考え、僕と彼女とのことを考え、そしてまた僕自身のことを考えた。それは何を見ても何を感じても何を考えても、結局すべてはブーメランのように自分自身の手もとに戻ってくるという年代だったのだ。おまけに僕は恋をしていて、その恋はひどくややこしい場所に僕を運びこんでいた。まわりの風景に気持を向ける余裕なんてどこにもなかったのだ。

前述のように、翻訳という観点では「のだ」は強調表現だと感じられるだけで、それ以上に詳しく分析されることはまずない。だが、この1段落に8つ

ある文のうち、第4、第6、第8の3回も強調表現が使われているとすると、修飾過剰の幼稚な文章だということにならないだろうか。現代日本を代表する作家の代表作なのだから、もっと丁寧に分析すべきだと思う。ではどうとらえるべきか。上記の「関係」「関連づけ」などの観点がおそらくヒントになる。

まず、第4文の「のだ」について。この「のだ」が第3文までと第4文を関連づけているのは確かだろう。『モダリティ』の分類では「提示・関連づけ」、『ハンドブック』の分類では「理由」にあたると思われる。前述のように、「のだ」は理由などの関連づけをあらかじめ示す表現だが、第4文の「のだ」を明確に表すのであれば、たとえばこうなるだろう。

なぜなら、正直なところ、そのときの僕には風景なんてどうでもいいようなものだったからだ。

あるいは、第4文を第2文の前に移して、論理的な順序関係通りの順番にする方法もある。

第6文の「のだ」はどうだろう。これも第5文を受けて、その「理由」を示していると考えられることができるだろうが、それより、第5文の内容を要約したと考える方がいいと思える。『モダリティ』の分類では、「提示・関連づけ」のうち「換言の提示」にあたり、『ハンドブック』の分類では「言い換え」に近いといえよう。英語流に結論をまず示すのであれば、第5文の前に移すのが適切だと思う。

第8文の「のだ」も「理由」を表していると思うが、順序が第6文のものとは逆のようだ。第7文が第8文の理由だという関係になっていると思える。第8文の「のだ」を明確に表すのであれば、たとえばこうなる。

だから、まわりの風景に気持を向ける余裕なんてどこにもなかった。

あるいは、第7文の前に移動して、「なぜなら」などの接続詞でつなぐ方法もある。

このようにみていくと、日本語では文末表現という目立たない形で、文と文の関係を示し、時間的な関係や論理的な関係を表現していることが分かるはずである。こうした構造はふだん、ほとんど意識されていないが、それでもいうならば無意識のうちに

把握されている。日本語が母語である人ならだれでも、「わたしは少年だ」と「わたしは少年なのだ」の違いを言葉でうまく表現することはできないにしても、敏感に感じ取っている。だから、英語にどう訳すかを考えると何らかの案が頭に浮かんでくるのである。

今回調べた 3 つの「のだ」についていうなら、いずれの場合にも、「のだ」の英訳に接続詞が使えるという直感の正しさを示しているように思う。

もうひとつの副詞で訳す方法については、第 4 節の第 17 段落から第 18 段落の冒頭にかけて、以下の部分をみていきたい。

「どうしてそんなことがわかるの？」

「私にはわかるのよ。ただわかるの」直子は僕の手をしっかりと握ったままそう言った。そしてしばらく黙って歩きつづけた。

ここで使われている「の」と「のよ」は「のだ」とほぼ同じ機能をもっている。いずれも『モダリティ』の分類では「非関連づけ・提示」にあたるといえよう。「すでに定まっているが聞き手は認識していない事態を提示し、認識させようとするときに用いられる」というのが『モダリティ』の解説である。このように「非関連づけ」の「の」や「のよ」は、当然ながら接続詞で英訳するわけにはいかない。では何を使うかという、副詞が適切だろう。

以上のように、国文法と日本語文法の研究の成果を利用すると、翻訳という観点では強調表現の一種だと感じられるだけだった「のだ」に、英語の接続詞や副詞に近い機能があることが裏付けられる可能性がみえてくる。

### 文末表現はどう英訳されているか

今回、文末表現について調べて見ようと思ったのは、パラレル・コーパスが作りたくて、さまざまな翻訳書とその原著をコンピューターに入力していたときだ。電子データになっていれば、たとえば「のだ」がどこで使われているかを簡単に探し出せる。とくに、日本語の小説を英訳した例で、「のだ」がどう訳されているかが気になり、調べ始めた。

結論からいうなら、強調構文で処理されていることはあるものの、「のだ」が伝える論理構造は無視されていることが多いように思えた。たとえば『ノルウェイの森』の第 1 章第 3 節第 1 段落について、

アルフレッド・バーンバウムとジェイ・ルービンによる 2 つの訳をみてみたが、「のだ」が訳されているようには思えなかった。参考までにルービン訳をあげておこう (Norwegian Wood, translated by Jay Rubin, Vintage, 2000 による)。

Memory is a funny thing. When I was in the scene I hardly paid it any attention. I never stopped to think of it as something that would make a lasting impression, certainly never imagined that 18 years later I would recall it in such detail. I didn't give a damn about the scenery that day. I was thinking about myself. I was thinking about the beautiful girl walking next to me. I was thinking about the two of us together, and then about myself again. I was at that age, that time of life when every sight, every feeling, every thought came back, like a boomerang, to me. And worse, I was in love. Love with complications. Scenery was the last thing on my mind.

ここで、I was at that age, that time of life when の部分は強調になっているものの、前のセンテンスとの関係は明示されていない。あと 2 つの「のだ」も訳されていないように思える。英語が母語である読者が読めば、暗黙のうちに論理関係が示されていると感じとれるのであろうか。感じとれるとすればなぜなのかを追究すべきだが、おそらく、そうはなっていないのだと思う。日本語の文末表現は、文法理論がまだ十分には発達していないために、誰にとっても理解が難しい。英日の優れた翻訳者にとっても、理解が難しいのだと思う。

第 4 節の第 17 段落から第 18 段落の冒頭にかけてでも、「の」と「のよ」は無視されているように思える。ルービン訳は、じつに淡泊なのだ。

"How can you be so sure?"

"I just know," she said, increasing her grip on my hand and walking along in silence.

日本語の文末表現が英日の優れた翻訳者にとっても理解が難しいことを示すように、もう少し理解がやさしいはずの文末表現も、バーンバウムとルービンの英訳で無視されていると思える場合が多かった。いくつかの例をあげておこう。原文はいずれも『ノルウェイの森』の第 1 章であり、訳はいずれもルービンによる。

### 第 1 節第 5 段落

スチュワードスはにっこりと笑って行ってしま、

音楽はビリー・ジョエルの曲に変わった。

She smiled and left, and the music changed to a Billy Joel tune.

#### 第1節第9段落

彼女はそう言って首を振り、席から立ちあがってとても素敵な笑顔を僕に向けてくれた。

She stood and gave me a lovely smile.

#### 第2節第1段落

十八年という歳月が過ぎ去ってしまった今でも、僕はあの草原の風景をはっきりと思い出すことができる。

Eighteen years have gone by, and still I can bring back every detail of that day in the meadow.

歩きながら直子は僕に井戸の話をしてくれた。

As we ambled along, Naoko spoke to me of wells.

このように、「～してしまった」「～してくれた」という文末表現は無視されている。「のだ」が無視されても不思議だとはいえない。

文末表現をみごとに訳している英日翻訳があれば、英語の微妙な表現を知る手掛かりになるのだが、『ノルウェイの森』の2つの訳はそうになっていないようだ。

もっとも文末表現以外の部分では、上に引用した部分だけでも、じつに面白い点がある。もう一度引用しておこう。

#### 第1節第9段落

彼女はそう言って首を振り、席から立ちあがってとても素敵な笑顔を僕に向けてくれた。

She stood and gave me a lovely smile.

#### 第3節第1段落

おまけに僕は恋をしていて、その恋はひどくややこしい場所に僕を運びこんでいた。

And worse, I was in love. Love with complications.

原文にある「とても」と「ひどく」という言葉は、どちらも very と訳せるはずだが、ルービンの訳には very がみあたらない。無視されているように思える。だが、以下の例もある。

#### 第2章第23段落

それは東京に出てきて僕が最初に感心したことのひとつだった。

This was one of the very first new impressions I received when I came to Tokyo for the first time.

このように、原文に「とても」とか「非常に」とか書かれていないのに、訳文で very が使われている例は少なくない。英語の very がどのように使われる語なのかを考えるとヒントになりそうだ。

以上では、文末表現という分野のうち、ごく一部を眺めただけだが、この分野に大きな可能性があることが理解いただけるはずである。とくに大きな点は、日本語の論理性についての見方が変わる可能性があることだ。日本語は論理表現に弱いという見方があるが、日本語の論理性を支える仕組みを理解できていないための誤解にすぎないのかもしれない。日本語の論理表現力をもっと鍛えなければならないのは事実だとしても、まずは、日本語についての理解をもっと深めるべきだ。文末表現はその際の対象の1つになると思う。

英語の感情表現についても、もっと理解を深めることができるだろう。日本語の場合には文末表現によって書き手や話し手の感情を表現できるが、英語にはこれにあたる文法範疇はない。このため、英語の感情表現は語彙、とくに副詞と形容詞が担っているように思える。翻訳の立場では、英語は感情を表現する副詞や形容詞が多すぎると感じられることがある。これを文末表現で訳すことができれば、ずいぶん楽になるように思う。そのためには英語と日本語とで副詞や形容詞がどう違うのかをもっと調べなければならない。大規模なパラレル・コーパスが完成すれば、分析が進むだろう。たとえば、英語と日本語で副詞の頻度が違うかどうかを調べるだけで面白い結果が得られるのではないかと思う。

## メディア翻訳

翻訳について語るとき、その9割9分はいわゆる「プロ」の翻訳家（翻訳者）による翻訳を対象にしている。しかし、人類全体の情報の生成・伝達・受容・解釈・編集などの一連の情報過程において見過ごされてきていることがある。それは、「ノンプロ」による「翻訳（的）行為」（translational / translatorial act）がいかに全人類の情報過程に深く関わっているか、である。今月号は、ジャーナリズム、とくに新聞という媒体（メディア）における翻訳行為について、翻訳学からアプローチし、どのような普遍性と特殊性があるかについて議論したい。（本稿は2010年1月・立命館大学での「日本の翻訳学の行方」で発表した内容に準拠している。）

### メディア翻訳とは何か——翻訳的行為の普遍性

メディア翻訳には両義性があり、(1) マルチ・モーダルなメディアにおける翻訳（映像翻訳・舞台翻訳・ビデオゲーム翻訳など）、(2) ジャーナリズムにおける翻訳（マスコミにおける翻訳）とがある。(1) は一部、ファンサブの分野でアマチュアによる字幕翻訳が見られるが、基本的には翻訳の「プロ」による翻訳行為の産物である。しかし、(2) はいわゆるジャーナリストが手がける翻訳（的）行為によるものである。

筆者が翻訳通信100号において翻訳学における8つの多様性について述べたなかにも、「(5)『翻訳行為』の『主体』の多様性：だれが翻訳をするのか？——プロの翻訳者、多分野におけるノンプロによる翻訳行為、素人の翻訳行為」がある。この「多分野におけるノンプロによる翻訳行為」の典型例が、ジャーナリストによる翻訳行為である。

ジャーナリストのなかには、語学力が優れている人たちが多くいて、翻訳のプロに匹敵する翻訳力を有している人たちもいる。しかし、ジャーナリストは自らを翻訳家（者）とは認めない。

ある程度確証を持って言えるのは、言語の境界を越えて情報が移動するにつれて、さまざまな情報源は削除、編集、合成され、「直訳」だと称するものが改変されるといった、あらゆる変容を情報が受けることである。また明らかなのは、多くのジャーナリストが自らを翻訳者であると称することにかなり困惑することである。むしろ、ジャーナリスト＝翻訳者、国際記者、あるいはもっと一般的に、単に、別言語の知識を持つジャーナリ

ストと自称するのを好んでいる。このような意義づけは目標文化を強調するものであって、翻訳プロセスのリライトの側面に焦点を当て、文化的な理解や目標文化の規範の知識は言語間転移という現実的な段階よりも重要だと捉えている。

(Bielsa & Bassnett 2009, pp. 14-15. 筆者訳)

筆者が数名の国際ジャーナリストに取材した結果も同じであって、彼（女）らは翻訳行為を日常的な業務のなかで常に行っているが、あくまでも情報の取材、編集、伝達が主たる業務であり、アイデンティティもそちらにあるとのことである。

このことを筆者は重要であると考えている。我々が日ごろ目にする情報、耳から入ってくる情報には、相当程度の通訳も含めた翻訳行為が介在している。しかし、その多くは、プロの翻訳者が翻訳しているものではなく、むしろ翻訳業とは別の業務を主とした他分野のプロが翻訳を行った情報がメディアを通して末端である我々読者、視聴者に届けられているのである。また、ビジネスの場面においても、いわゆるプロの翻訳者が行う翻訳とはややかけ離れている要約的な翻訳や他言語のテキストをリライトして日本語に直したものを目にする事が多い。

このことは、2つの示唆を含む。ひとつは、翻訳学の研究対象にこのようなノンプロによる翻訳（的）行為を包含させる必要があること。もうひとつは、今後の翻訳教育においては、純然たるプロ翻訳者を養成することのみを念頭に置いた翻訳教育を行うのではなく、むしろ学生が実社会に出たあとで、さまざまな業種のさまざまな業務で要求されるバイリンガル能力（近時はプルリリンガル能力と言っている）を養成する一環として翻訳教育を位置づける必要が特に大学の学部レベルであること、である。

メディア翻訳を追究することにはこのような普遍性があるが、翻訳教育については論を改めることとし、ここではメディア翻訳の特殊性について論じてみたい。

### メディア翻訳とは何か——特殊性

#### 1. 序論

このメディア翻訳は、メディア論・ジャーナリズム論においても、また翻訳学においてもほとんど扱われてこなかった分野である。そこで本稿では国際ニュース報道記事制作における翻訳プロセスを取り上げ、従来の翻訳学上の概念である「等価」、「起

点テキスト／目標テキスト」、「直訳／意識」、「異質化／受容化」などを再考しつつ、マルチ・グローバル・メディア時代の日本における翻訳学の新展開について概観してみたい。

これまで、メディア論・ジャーナリズム論において国際ニュース報道記事の研究は盛んに行われてきた（日本の研究では例えば、武市・原 2003; 伊藤（陽） 2005; 伊藤（守） 2006; 伊藤（陽）・河野 2008 など）。ところが、その制作過程において翻訳行為が深く関与していることは等閑視され、研究の対象とはされてこなかった（英語ニュースの特徴分析などは、浅野 1992; 藤井 2004 など。なお、藤井 1996 はニュース英語の翻訳プロセスを扱っているが、具体的な編集技法としての翻訳を扱っているのみで、その社会的意義などは深く論じていない）。

また、翻訳学において、従来は文芸・出版翻訳をプロトタイプとした議論が盛んであり、他方、翻訳産業の市場のかなりのシェアを占めてきたローカリゼーションの研究や、言語テキスト外の要素も多分に関与するマルチメディアの翻訳（映画・テレビ・舞台などの字幕・吹き替えの翻訳）の研究も翻訳学の別の機軸として近時、展開されてきている（概説的な説明は Munday 2008 第 11 章を参照）。このような学説状況の中、国際ニュース報道における翻訳は研究の対象としてとりあげられないままであったが、画期的な著作が現れ（Bielsa & Bassnett 2009）、必ずしもプロの翻訳者による翻訳行為ではない、メディア翻訳という新分野の研究領域が開拓され始めてきたところである。第四の権力と称されるマスメディアの社会的な影響力に鑑み（いわゆるレペタ訴訟に関して、樋口 1992, pp. 228-229）、日本においても改めて翻訳学の視点から国際ニュース報道に関する研究を行う必要性は十分にあると言える。

## 2. 国際ニュース報道記事の制作過程

メディアをめぐる翻訳の状況は、典型的な出版翻訳や産業翻訳とは異なり、（プロの翻訳者ではない）報道関係者自身が翻訳行為を兼ねた業務を行う半面、翻訳者の訳出行為を制約しつつも一部、プロの翻訳者に訳出を任せているプロセスもある。その一方で、現地で通訳者・翻訳者に取材・情報収集行為を担当させている場面もあるなど、翻訳行為の主体の面でも、記事作成行為全体における翻訳の関与の度合いの面でも、「翻訳」という観点からは極めて特殊性がある（本稿では、プロの翻訳者が関与している局面は取り上げない）。

具体的には、筆者が複数の新聞記者、通信社の編集者にインタビューした結果によると、大きく分け

て国際ニュース報道記事の制作では、以下の3つのプロセスがある。

- ① 通信社や放送局など現地メディアが発信した記事やニュースの国際部（外報部）記者による翻訳（直接翻訳）
- ② 現地メディアからの情報収集・編集による記事作成（複合プロセス）
- ③ 海外に派遣された特派員の直接取材による記事作成（直接取材）

(Kawahara & Naito 2009; Kawahara 2009)

詳細に見てゆくと、① 直接翻訳（direct translation）はロイターや AP といった通信社が配信する外国語（ほとんどの場合、英語）による記事を国際部（外報部）の記者が翻訳し、編集をして最終プロダクトとしての記事を作成する場合や、CNN や BBC といった放送局が配信する外国語のニュースを国際部の記者が翻訳し、編集をして最終プロダクトとしての記事を作成する場合がある。その際、情報源が外部機関報道のものであるので、情報源の名称を引用する。

次に②複合プロセス（complex process）は、現地スタッフという取材・翻訳補助要員が現地の新聞記事やテレビニュースから重要な情報を選んで特派員が必要とする言語に翻訳ないし要約をする。そして特派員は現地スタッフの助けを借りて現地メディアが伝えたニュースの情報源ないし関係者に対して取材を行い、日本語で記事を書いて東京本社に配信し、本社で記者によって編集が行われて最終プロダクトとしての記事を作成する。

③直接取材（direct coverage）は日本から派遣された特派員が現地の取材対象者に現地で使用されている言語を用いて取材を行い、その後、直接日本語で記事を書いて東京本社に配信し、本社で記者によって編集が行われて最終プロダクトとしての記事を作成する。

これら3つのプロセスにおいて、①通信社配信の記事の国際部（外報部）記者による翻訳、②現地メディアからの情報収集・編集による記事作成、の2つの過程において、“transediting”と呼ばれる「翻訳＋編集」という複合行為が関与している。これは1989年の第4回スカンジナビア英語研究会議で Karen Stetting が提唱した概念で、概略は以下の通りである。

ニュース翻訳では、ジャーナリストは目標言語のメディアの規則や慣行に従ってそのコンテキストに合致するようにテキストをリライトしなければ

ならない。これには起点テキストの変容が相当程度伴い、結果として目標テキストの内容が大きく変わってしまう。他方、ニュース翻訳のプロセスは編集プロセスとそれほど違うものではなく、ニュース記事がチェックされ、修正・訂正され、洗練されて発表されるのである。

(Bielsa & Bassnett 2009, p. 63. 筆者訳)

つまり、新聞記者やジャーナリストによるニュース記事作成における翻訳行為は、本来の業務であるニュースの編集行為の一環として行われており、当然、編集作業に伴う（中立的な意味における）情報操作を伴うものである。この情報操作性の具体的な内容は以下のとおりである。

特筆すべきは、ニュース記事の翻訳においては、削除が重要な方略となる。ニュース記事の情報は特定の限定された地域（つまり目標言語の国の）読者のニーズに合わせて調整される。ニュース記事の翻訳にはあらゆる種類のテキスト操作が伴っており、それには合成、削除、明示化、その他多様なテキスト方略が採られる。

(Bielsa & Bassnett *ibid.*, p. 8. 筆者訳)

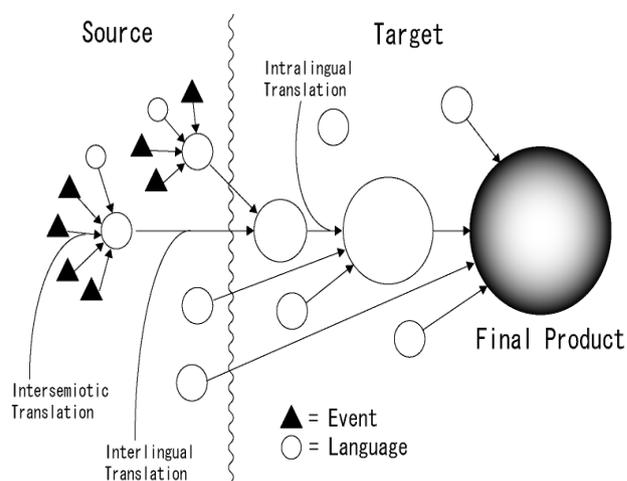
このような特性を有する国際ニュース報道記事の制作過程における「ニュース翻訳」は、翻訳学の見地からはどのように評価できるだろうか。

### 3. 翻訳学からの考察

国際ニュース報道記事の制作では編集行為と翻訳行為が錯綜し、「翻訳」という概念自体の見直しを迫られる。また、前節で見たように記事自体が同一言語内で多数の人間の“rewrite”作業を伴った複雑なプロセスを経て制作され報道されていることや、マスメディアの業務が世の中の出来事（という記号）を言語（という別の記号）で伝達することであることに鑑みると、マスメディア自体がヤコブソンのいう3種類の翻訳（記号間翻訳・言語間翻訳・言語内翻訳）を内包した営みであるといえる。そこで、広義の「翻訳」の観点からマスメディアの営為を再構成すると次のようになる（Kawahara & Naito 2009）。

- (1) **Intersemiotic Translation:** 記号間翻訳（出来事を言語で表現する）
- (2) **Interlingual Translation:** 言語間翻訳（ある言語を別の言語に翻訳する）
- (3) **Intralingual Translation:** 言語内翻訳（ある言語内で言い換えをする）  
(Jakobson 1959/2000)

下の図にあるように、最終的に発表する記事に仕上げるまえに、さまざまな情報源を使って、元々の取材情報の加工、削除、追加、圧縮などの編集を行う。国際ニュース報道記事の制作では情報源たる起点（テキストないし情報）が、ある出来事取材した情報の断片であったり、現地語で発信された新聞記事やテレビニュースなどの言語情報であったりする。さらに、編集作業をする中で、随時アップデートされる取材情報、他のニュースソース、あるいは日本語で書かれた同一出来事を扱った記事などを起点としてさらに目標たる新聞記事が修正される。このような複雑な過程を経て初めて最終の記事になる。つまり、翻訳学で当然視されている「起点テキスト」や「目標テキスト」という概念（Chesterman 1997 の言うスーパーミームの1つ）自体、ダイナミックに揺れるものである。



「起点テキスト」はテキストに限らず、さまざまな記号（取材対象たる出来事、取材情報の断片など）であり、それが常にアップデートされ更新を繰り返すし、そのことを受けて暫定的な「目標テキスト」自体も常にアップデートされ編集を繰り返す、最終の記事が出来上がるまでにどのような起点情報がどの程度採用されているのかの同定が極めて困難であるという特徴がある。したがって、従来の概念である「等価」（Chesterman のスーパーミームの1つ）も、一体何と何の等価なのか定かでない、この概念自体、揺さぶりを受けることになる。

ここで、前節の3つのプロセスを改めて分析してみる。国際ニュース報道記事の制作プロセス全体の中に本来の意味での翻訳（interlingual translation）行為性が関与する度合いは、①>②>③と表せ、具体的には以下のマトリックスで示される（表の中で、要素の強い順に、◎>○>△で表している）。

news translation	dimensions of translation		
	(1) 記号間	(2) 言語間	(3) 言語内
process ① (direct translation)	△	◎	○
process ② (complex process)	○	○	○
process ③ (direct coverage)	◎	△	○

このことが意味しているのは、①>②>③の順で本来の意味での翻訳行為性が関与する度合いが高いため、それに連動して「言語テキストを起点とした翻訳」という行為性も強い。そして“transediting”と考えられるニュース翻訳は、翻訳行為一般が有している創造性とイデオロギー性を備えているといえる。

翻訳とは、単なる忠実な再現行為ではなく、むしろ選択、組み合わせ、構造化、模造という意図的で意識的な行為である。そして時として、改ざん、情報の拒絶、偽造、暗号の創造ですらある。このように、翻訳者は想像力豊かな作家や政治家と同じように、知を創造し文化を形成するという権力行為に参画している。

(Tymoczko & Gentzler 2002, p. xxi)

「直訳／意識」(Chesterman のスーパーミームの1つ)で言うならば、ニュース翻訳は当然「意識」であるし、「異質化／受容化」で言うならば大幅な受容化(domestication)を行っていると言える。これは、客観報道主義という理念(Westerstahl 1983によると、真実性・関連性・均衡性・中立的表現がその構成要件である。歴史的経緯などはシーバートほか 1956/1959 など)に反し、実践的には、一連のニュース生産過程の中で、読者の関心の分布状況を常に意識してニュースとして扱う出来事やその記事の重要度が判断されるというニュース・バリュー(Shoemaker & Reese 1996)が支配的であること(大石 2005)に呼応するものと言える(その他のメディア報道の主観性・偏向性に関する議論は割愛する)。つまり、①>②>③の順で、テキストを翻訳するという行為に、メディアが本質的に抱える情報の操作性が大きく反映されている、と言える。

#### 4. おわりに

このようにマルチ・グローバル・メディア時代の「日本における翻訳学の行方」には、メディアに内在する起点の複層性に加えてメディアがマルチ化・グローバル化したことにより、ニュース翻訳では起

点そのものが揺れ、目標も不確定で暫定性を帯び、従来の翻訳学の概念装置である「等価」、「起点テキスト／目標テキスト」、「直訳／意識」、「異質化／受容化」の概念もまた揺さぶりをかけられるという新たな展開(転回)が待ち受けている。

#### 参考文献

- 浅野雅巳(1992)『英語メディアにみる表現と論理』研究社出版
- 伊藤守(編)(2006)『テレビニュースの社会学』世界思想社
- 伊藤陽一(編)(2005)『ニュースの国際流通と市民意識』慶應義塾大学出版会
- 伊藤陽一・河野武司(編)(2008)『ニュース報道と市民の対外国意識』慶應義塾大学出版会
- 大石裕(2005)『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房
- シーバート, F. S.ほか(1956/1959)内川芳美(訳)『マス・コミの自由に関する四理論』東京創元社
- 武市英雄・原寿雄(編)(2003)『グローバル社会とメディア』ミネルヴァ書房
- 藤井章雄(1996)『ニュース英語の翻訳プロセス』早稲田大学出版部
- (2004)『放送ニュース英語の体系』早稲田大学出版部
- Bielsa, E. & Bassnett, S. (2009) *Translation in global new*, London & New York: Routledge.
- Chesterman, A. (1997) *Memes of translation*, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 樋口陽一(1994)『憲法』創文社
- Jakobson, R. (1959) On linguistic aspects of translation. In Venuti, L. (Ed.). (2000). *The translation studies reader*, London & New York: Routledge.
- Kawahara, K. (2009) “The role of translators and interpreters in the Japanese media analyzed from the audience’s point of view” *Reitaku University Journal*, 88: 63-79.
- Kawahara, K. & Naito, M. (2009) “Roles of news reporters in translation process at Japanese newspapers: Conflicts between translation and manipulation” in IATIS conference, oral presentation.
- Munday, J. (2008) *Introducing translation studies*, (2nd ed.) London & New York: Routledge.
- Shoemaker, P. & J. Reese, S. D. (1996) *Mediating the message*, (2nd ed.) Edinburgh Gate: Longman.
- Tymoczko, M. & Gentzler, E. (Eds). (2002) *Translation and power*, Boston: University of Massachusetts Press.
- Westerstahl, J. (1983) “Objective news reporting: General promises” *Communication research*, 10 (3): 414-421.

## 世界に君を叫べ！

ここでは、私が興味深いと感じた韓国の本や今韓国で話題の本を毎月紹介していく。この記事を通して、少しでも多くの読者の方に韓国の良書を知って頂き、韓国に親しみを持って頂ければ嬉しく思う。

今月は『世界に君を叫べ！(原題：세상에 너를 소리쳐!)』という本を紹介していく。本書は、現在日本で絶大な人気を誇っている韓国人アーティスト、BIGBANG が初めて書いたエッセーである。この作品は出版後すぐに韓国で話題となり、あらゆる年代の読者の共感を呼んで韓国 2009 年総合ベストセラー書籍ランキングで 5 位にランクインすることができた。

これまで BIGBANG の音楽やミュージックビデオに触れたことがある人なら恐らく誰もが、彼らのパフォーマンスのレベルの高さに驚いたことであろう。彼らの卓越した歌唱力と創造力、そしてカリスマ性から、BIGBANG は多くの人目に「完璧」で「洗練された」アーティストとして映し出されているはずだ。

しかし、本書を読めばそれらは単なるイメージでしかないことに気づく。『世界に君を叫べ！』でメンバーは BIGBANG が有名になる前から現在に至るまでの経緯をそれぞれ描いており、主に所属事務所での過酷な練習生時代の話を中心に綴っている。そこには「完璧」と呼ぶには程遠い苦悩、挫折、そして戸惑いや焦りなど、彼らの人間らしい姿が記録されている。叶うかどうか分からない歌手という夢に全てをかけ、5 人は毎日 12 時間、歌・ダンス・ウェイトトレーニング・外国語等、7~8 つのレッスンをこなしていった。また、BIGBANG のメンバー選定するオーディションはいつ誰が脱落するかが分からないサバイバル方式であり、彼らは常に不安や疲労と隣り合わせの状況だった。それでも日々成長していくために、そして自分の夢を必ず叶えるために 5 人は果敢に挑戦をし続けていった。

本書の魅力は、テレビや雑誌ではあまり知ることができない BIGBANG の数多くの意外な一面に触れることができる点だろう。数ある試練にぶつかるたびに、彼らは何を思い、どう乗り越えてきたか。何に悩み、何を恐れているか。そして、高みを目指し走り続ける彼らの原動力とは何なのか。本書は、青春を駆け抜ける BIGBANG の情熱を私たちに存分に見せてくれる。5 人の挑戦を続ける生き方は熱いメッセージとして読者の心に響くはずだ。

**題名：**世界に君を叫べ！

**原題：**세상에 너를 소리쳐!

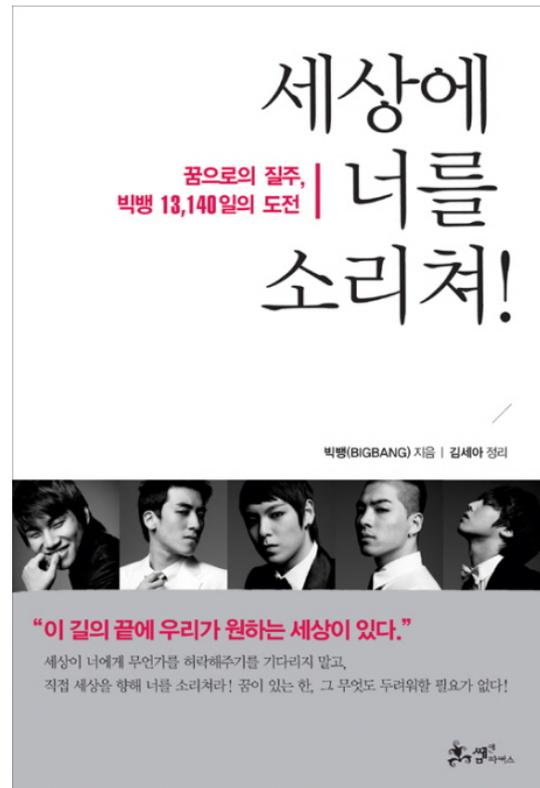
**页数：**277 頁

**著者：**BIGBANG

**出版社名：**Sam&Parkers

**発行：**2009 年 1 月 28 日

**著者紹介：**韓国のヒップホップ・グループ。メンバーは、G-DRAGON (クォン・ジョン)、SOL (ドン・ヨンベ)、D-LITE (カン・デソン)、T.O.P (チェ・スンヒョン)、V.I (イ・スンヒョン) の 5 人。2006 年 8 月に韓国でデビューした後、2009 年 6 月に日本でメジャーデビューを果たす。ソロ曲の発表、作詞・作曲や演出、舞台やバラエティー番組への出演など、メンバーそれぞれが多彩な分野で活躍している。



### 本の一部を紹介！

ここで『世界に君を叫べ！』の一部を紹介していきたいと思う。まずは、私が個人的に意外に感じた BIGBANG の一面が描かれた部分を紹介する。

「僕たちは社会生活を学ぶべき時期の大部分を練習室で過ごしたせいで、みんなかなりの恥ずかしがり屋だ。……数万人を前にした舞台よりも、馴染のない人間 1 人の方が怖い臆病者だ。時にはファンと

会うときでさえ、恥ずかしくて顔が赤くなる。…だから、BIGBANG に足りないものを1つ選べと言われたら、僕は迷うことなく社交性を上げるだろう。デビュー当初は“お食事はされましたか？”という、とても簡単な挨拶でさえ、勇気を出してかけることができないほどだった」(Stage 1「努力して楽しんで、楽しんで努力して…、僕を成長させる方法」から抜粋、著者：G-DRAGON)

舞台での自信に満ち溢れた BIGBANG からは想像もできないような姿だ。世界中から注目を浴びている彼らが、数万人規模の大舞台よりも1人の人間を恐れるということに大変驚いた。

次に少しコミカルな部分を紹介する。これは BIGBANG のお笑い担当とも呼ばれている D-LITE が描いたものだ。BIGBANG についてあまり知らない人も、ここを読めば親しみを覚えるかも知れない。以下の部分は D-LITE が出演することとなったミュージカル「キャッツ」の練習現場での出来事である。

「最初は(ピタッとした猫のタイツが)恥ずかしくて、みっともないから普段着を着て練習していたが、他の俳優の方はみんなその衣装を着て本番のように練習に臨んでいるではないか。一緒に出演していたオク・ジュヒョンさんから「今から着ておかないと後で舞台に立ったときになじまなくなる」とアドバイスをされたので、なんとか勇気を出して衣装を着て練習に出た。ところが、何てことだ！ こともあろうにその日はボーカルトレーニングの日だった。先輩はみんなタイツではなく楽なパーカー姿で来ているのに、僕1人だけが体にピタッとくっついたタイツを着て来たのだ」(Stage 3「僕は“前向きウイルス”でいたい」から抜粋、著者：D-LITE)

3つ目は、メンバーの仕事に対する真摯な姿勢が描かれている部分を紹介したい。ここまで高いプロ意識を持った若いアーティストを他に探すことは難しいだろう。BIGBANG のレベルの高いパフォーマンスはこのような姿勢から生まれているのだと思われる。

「僕は趣味で所属事務所の練習生になったのではない。この練習生のプロセスで本当に忠実でしっかりとした人間に成長して、結果を見せることのできる職業人になろうとしているのだ。僕が進もうとしている道は僕の人生を賭けた仕事であり、冷酷なビジネスだ。当然、過程なんてものはあまり重要ではない。“頑張ってやったのに何で分かってくれないんだ”という甘えは通用しない。誰だって一生懸命するものだ。……実力に対する評価を客観的に冷静

に受け止める準備ができていなければ、どんな仕事であろうと成功することはできないと思う」(Stage 2「“運命”はまるで“偶然”のように僕のもとへ訪れた」から抜粋、著者：SOL)

BIGBANG は「完璧」で出来上がったアーティストではなく、これからもっと発展していく「進化系」アーティストである。最高を目指してこれからもどんどん邁進し続ける彼らの前向きなメッセージを最後に紹介したいと思う。

「僕たちが本当に恐れないといけないものは失敗ではなく、挑戦と変化を恐れるカチカチの心を持つことだ。もし今挫折という壁にぶつかって静かに泣いている友人がいればこう言ってやりたい。“倒れても大丈夫だ！ 俺たちまだ若いじゃないか”」(G-DRAGON)

「“学ぶこと”こそ、僕の最も大きなエネルギー源だ。この世界に僕たちが知るべきこと、学ぶべきことが多いということは本当にうれしくてわくわくする。ポイントをどんどん貯めていく気分でも言おうか？ 良いことを学んでおけばそれを自分のものとすることができるからだ」(SOL)

「だから僕は笑う。願いを手放した瞬間そこには絶望が残るが、希望を抱いた瞬間そこには奇跡が起きるというから。人生はいつでも僕たちに希望のノックをしている」(D-LITE)

「“自分はこの人だ”というように何かを決めつけるのはやめた方がいい。“自分自身”というきまりきったものなんてどこにもないのだから。僕はひたすら自分が創っていく通りに創り出されていく。人間が持っている欲の中には良くないものもあるが、真の欲とは“自分が創りたいように自分を創っていく”ことだと思う。」(T.O.P)

「挑戦は怖くない。失敗も怖くない。一生懸命すれば、諦めなければ、必ず成し遂げられるという事実を今までたゆまず学んできたから。僕が進む道がどんなに険しくてこぼこしていたとしても僕は知っている。この道の先には僕が望む世界が待っているということ」(V.I)